

「地の果てに至るまで私の証人」

使徒言行録 1 章 3～11 節

十字架に付けられてから三日後、復活のイエスは愛していた人たちに現われました。今日の聖書箇所によれば、それは「使徒たち」、すなわち 12 弟子にです。弟子たちの喜びは、どれほど大きかったことでしょうか。というのも、それまで、弟子たちはまったくの「虚無」の中に入っていたからです。

使徒言行録の著者ルカの福音書によれば、イエスと行動を共にしていた時、弟子たちは、イエスこそが自分たちイスラエルの民をローマから解放し、国を復興する預言者、メシアだと信じていました。そればかりか、このイエスのためなら、家を捨て、仕事を捨て、故郷を捨てても悔いは無い。自分の人生を賭けても後悔しないと、イエスについて行きました。イエスこそが最後の望みだったからです。自分の生活を犠牲にしてもかまわないと思ったのは、イエスによって実現されることが、自分たちの払った犠牲に対して不平を言わせないほどに素晴らしいことであり、長いあいだ先達も待ち望んでいたこと。すなわち、神の民イスラエルの復興であったからです。

ところが、結末はそれとは正反対でした。希望の糸を断ち切られた弟子たちは、それまで繰り返しイエスから聞いてきたこと。つまり、「自分は必ず十字架につけられて死ぬけれども、三日目に復活する」という約束の言葉を忘れてしまったかのように、イエス独りを十字架の上に置いて逃げ、息を引き取った後は、遺体の引き取りにさえ立ち会いませんでした。その理由は、ヨハネ福音書によると、「イエスを処刑したユダヤ人を恐れていたので、内側から自分たちの家に鍵をかけて」（20 章 19 節）家の中に引きこもっていたためと伝えています。

しかし、「家の中に引きこもるしかなかった」その理由は、ユダヤ人に対する恐れだけだったのでしょうか。イエスに呼び出され、家族を捨て、仕事を捨て、故郷を捨てて従った弟子たちは、まったく報われませんでした。それどころか、信頼し、すべてを預けて「先生」と呼んだ人が、自分の目の前からいなくなってしまった。それも、恥辱の極みにおいてです。弟子たちの心はとてつもなく苦く、暗く、鉛のように重たかったに違いありません。「敗北感」とか、「絶望」とか、「信頼を裏切られた」とか、そんな言葉では表現できない。そのような言葉には到底納まりきれない、もっと複雑で、もっと空虚で、どうしようもない感じ。強いて云うならば、「挫折」とでも表現できるのでしょうか。

「生きている」ということを、まるで感じることでできないほどの「無感覚」。それが弟子たちを包んだとしても、不思議はありません。ある人に希望と光を見て、自分の存在の全てを賭けた人が、突然取り去られる。まるで「道端の石ころのように放り出される」ような孤独を味

わうに違いありません。音も光も届かない、暗黒の真空状態のようなその中で、「生きているけれども、死んでいる」、「ただそこにころがっている」としか感じられない弟子も、いたはずでしょう。この空虚感、無力感は、恐らく、自分の生活を全て捨て、一人の人に賭けて行った、そのような人にしかわからないものでしょう。復活のイエスは、実にそのような弟子たちのところに來られたのでした。

長い間、人との音信が途絶えたとします。しかし、一旦、音信が復活し、その人が沈黙を破って語り始める時、その第一声は、それまで心に溜めていたもの、その人の中で発酵していた何かが露わになります。心一杯に満ちていたものが、言葉になります。それは、死を潜り抜けて三日目に戻って來られたイエスにとっては、「神の国」についてでした。「神の国」は、最初から最後まで、地上のイエスの生涯を貫いて、その言葉と業の中心でした。イエスはご自身が「神の国の福音を告げ知らせる」ために地上にあることをはっきり判っておられて、そのような者として語り、生き、教えられました。地上を歩いていた時のイエスの心と、復活したイエスの心を占めていたものは、変わることなく「神の国」でした。復活の主と再会した弟子たちは、イエスから、復活後の40日、絶えず「神の国」について聞きます。しかしそれにもかかわらず、イエスが天に上げられる間際、このように尋ねます。6節「イスラエルのために国を建て直す時が、今、來たのですか」。

福音書には、弟子たちがイエスの語ったことを理解でなかったため、たびたびイエスから呆れられ、叱られたと記されています。それは復活のイエスが神の国について語ったこの時でも、同じでした。イエスは、神の国は貧しい人たちのものだと言いました。神の国には、東から、西から、南から、北から、即ち、地上の方々から人々がやって來る。神の国は、蒔かれた種が人間の知らないうちに芽を出し、葉を繁らせ、実を結ぶように、人が「そこにある、ここにある」という形では來ない。神の国とはまた、幼な子のように駆け引きや計算のない無垢な心に開かれていて、物質的な意味でも、精神的な意味でも「自分を支え、守る余分なもの」を財産として持ち、それに心を奪われる人が入るのが難しい。そのように教えられました。

そもそもイエスの教えた「神の国」は、地図で見える事ができるような地理的な意味での「国」ではありませんでした。目には見えず、特定の形はとりませんが、そこに確実に神の義（ただ）しさが真っ直ぐに貫かれ、それと表裏一体のようにして、神の愛が豊かに存在している。そして、神の愛と義とが川のように尽きることなく人と人の間に流れているところでした。詩篇 1 章 3 節で「その人は流れのほとりに植えられた木」と謳われているように、神の国で、人は、神の義しさと神の愛を求め、それによって「のみ」生きてゆく。人の名や思いが崇められるのではなく、神の御名と御心が崇められてゆく。そのような神の支配が満ち満ちている「神の国」は、神の御旨を求める人々の「中にある」と教えられました。

そうであれば、「主よ、イスラエルのために国を建て直してくださるのは、この時ですか。」という弟子たちのこの質問は、なんと、的外れに聞こえるでしょうか。イエスの教えに照らせば、そんな形で「神の国」が來ることはあり得ないのでした。実際、イエスが生きていた間で

さえも、イエスによる政治革命は起きず、ローマは依然としてイスラエルの民の上に力を振るっていました。弟子たちの悲願であったイエスによる「イスラエルのための国の復興」は実現しなかったのです。それにも拘わらず、この時点でまだ「イスラエルのために国を建て直すのは……」と、イエスに尋ねる弟子たちのこのズレはどうでしょうか。

しかし、同時に、そして興味深いことに、弟子たちは、「死」によって弟子たちの前から姿を消し、「復活」によって再び戻って来たイエスが一番大切なこととして語った「神の国」の、40日間という長い期間を通して語り続けたそのことの、「意味や内容」を確かめていないばかりか、問うこともしていません。これまで何度も聞いているため必要はないと思ったのでしょうか。弟子たちには「神の国」はすでに明らかで、分かっていることだったのでしょうか。そのためでしょうか。弟子達にとっては、神の国が何時始まって、どれ位で完成するのかという、極めて具体的な関心が心を占め、それこそが一番の知りたいことであったようです。それほど、切羽詰まっていたと言えるかもしれません。

これについて、聖書は何も語っていません。しかし垣間見えるのは、この時点では、弟子たちは、これまで自分たちが馴染み、育ってきた環境や文化、つまりユダヤ教社会の伝統のある部分、引きずっていたということです。イエスの福音によって生きることと、これまでの古い伝統や慣習で生きることの違いがまだ、それほどはっきりしていなかったように思うのです。そのため、ペンテコステの出来事が起こってもしばらくは、祈りの時にはユダヤ教の神殿に行き、教える時には神殿で教えるというように、これまでの伝統に沿いながら、信仰生活を送っていました。

イスラエル民族は、長い間、バビロニア、ペルシャ、ギリシャ、そしてローマというように、次々と列強の外国に支配され続けてきました。そのために、イスラエル民族なら、誰もが神が直接歴史に働いて、自分たちの民族が解放され、祖国が建て直されて、選ばれた神の選民として地の果てまで支配するようになることを夢見るのは当然で、事実、先達の一生はそれを待ち続ける生涯でした。そのような中で生まれ、育った弟子たちでしたから、自分たちの最高の喜びは、栄光は、ユダヤ教徒のそれに似て、生きている間に、自分の眼でイスラエルの国の復興を見ることであったとしても不思議ではありません。このような弟子たちですので、「神の国」の到来としてのイスラエルの国の復興について、その時や完成の有様をイエスに尋ねたとも考えられます。

それに対して、イエスは実に不思議な返答をしています。まず、7節「父が御自分の権威をもってお定めになった時や時期は、あなたがたの知る所ではない。」と言われました。口語訳聖書では、「時期や場合は」と訳しています。つまり、「イスラエルの国が立て直される時や場合については時があるけれど、それは父である神が御自分で定められる。あなたたちは気にかけなくてもよい。」と言われたのです。

自分達にとって大切なこと、気になることであればあるほど、それが何時、どのような形で、何時頃に実現するのかを知りたいのは人情というものです。それを知って準備をしたい、態勢

を整えたい。何よりも、それを励みに生きて行きたいことでしょう。無責任でいたくない。ただ待つばかりでいたくないのです。しかしイエスは、国の復興という民族の悲願について、当事者の弟子たちは、心を煩わせる必要はないとでも言っているように聞こえます。いいえ、実際、そうおしゃっています。

しかしそれは、弟子たちが漠然と、漫然と、いかなる責任も負わなくて良いという意味ではありませんでした。イエスの眼は、「いつ、如何なる形で」ということよりも遥かに重要な「こと」に注がれていました。その時が来ると、弟子たちはじっとしてられないような促がしを受け、背中を押されるに違いない。確信にみちて、こう語られます。「確かに父が御自分の権威をもってお定めになった時や時期は、あなたがたの知る所ではない」、しかし、8節「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりではなく、ユダとサマリアの全土で、また地の果てに至るまで私の証人となる」。

ここに「しかし」という言葉を補いました。これは、新共同訳聖書では省略されていますが、言葉がギリシャ語の聖書には、それに相当する単語が7節と8節の間にあります。この「しかし」を境にして、まるで時計の針が180度回転するような決定的なことが、イエスの思いと、弟子たちの思いの間に、内容的にも質的にもまったく違う何かがかくつきりと横たわっていることを示しています。それは、自分たちの国を復興する力をイエスが振るうことを期待する弟子たちに対し、イエスは、そう期待する弟子たち自身が「力」を得ると言うのでした。

その「力」は、イスラエルという特定の国、特定の民族の回復のためにではなく、イエスが「父」とお呼びになる神が、全ての上に力を持つただ一人の王であること、その神の義（ただ）しさと愛が地の果てまで、隅々にまで知られるようになるために用いられるそのような「力」である、と言われます。

弟子たちは、ユダヤ教徒の時のように、この時にもイスラエルの復興を待っています。それに対して、イエスは、ある時から、弟子たちは「待つ者」から「出て行く者」となると言われます。ユダヤ教であった時のように、神の民の回復がエルサレムで完成することを夢見ていた弟子たちに対して、イエスは、それはエルサレムから始まってもそこに留まらず、エルサレムを超えてユダヤ全国（南北 192 キロ、東西 64 キロ）に、外国のサマリヤにまで広がってゆくと語ります。これらのこと全ては、「あなた方の上に・聖霊が降る時」に「必ず起こるに違いない」！ 力強い未来への確信を表わす表現で、イエスは弟子たちの問いに答えられたのでした。

復活のイエスは弟子たちに言います、「エルサレムを離れず、父の約束されたものを待て。」と。イエスが地上にある間、父なる神から絶えず注ぎ続けられた「聖霊」が、今度は弟子達に「高い所から、力」として（24：49）注がれるという約束です。この聖霊によって、この聖霊のみによって、弟子たちは始めて「キリストの証人」となるのでした。

こう話してイエスは弟子たちの目の前で天に上げられ、雲に覆われて見えなくなりました。10節は、弟子たちが、そこに立って天を見つめ続けていたと記します。また「先生」が自分たちを置いて行ってしまわれた。まるで「放心した」かのように突っ立っていたの

でしょうか。その弟子たちは、「白い服を着た二人の人」、天の使いに呼びかけられるまで我を忘れていました。確かに何かが起こり、それを肉眼では見ているのだけれども、何が起こったか一向に判らないかのようです。その弟子たちに、天の使いは言います。11節「ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのですか」、「今天に上げられて離れていったイエスは、あなた方が見たのと同じような仕方でもたおいでになります。」と。

その時、最早弟子たちは、「それはいつごろ、どのような場合にですか。」と天の使いに質問しませんでした。その代りに、イエスが命じた通り、約束された聖霊が注がれるのを待つために、エルサレムへ帰って行きました。エルサレム。それは仲間の弟子たち、イエスに最後まで寄り添った婦人たち、そしてイエスの母、兄弟が集まって、「心を合わせて熱心に祈っている」場所でした。

この後、イエスが語った通り、ペンテコステの日に一人一人に聖霊が下り、それぞれが「他の国の言葉で、神の救いの業を話し出し」ます（2章4節）。そして、ペテロがキリスト教で最初の説教、それも大伝道説教をしました。バプテスマと晩餐が執り行なわれ、祈りの交わりが出来、信者の共同生活が始まりました。聖霊を受けた者たちを通して、イエスの言葉と働きが証しされ始めました。イエスの証人の登場です。ここから「教会」が始まりました。

初期の教会の信者たちにとって、自分たちの生活と「キリストの証人」としての生活は同じことでした。「証人」は、「実際に経験したことを事実として語り、確信をもって告白する者」のことです。教会の交わりの中心であった弟子たちは、「心を尽くし精神を尽くして神を愛し、隣り人を愛す」ことを一番大切なこととして教えたでしょう。なぜならば、そのように生きたイエスの傍近くにおり、「心と精神を尽くして神と人とを愛すること」を身を以て学んだのですから、交わりの中で、学んだとおりを行なったはずです。

次の2章には、その交わりで、聖霊に満たされた信者たちが「皆一つとなって・すべての物を共有し・財産や持ち物を売り、おのおの必要に応じて皆がそれを分け合った・毎日ひたすら心を一つにして神殿に参り・家ごとに集まってパンを裂き・喜びと真心をもって一緒に食事をし・神を讃美」していたと書かれています。心を一つにして神を讃美しながら、喜びと真心に溢れた交わり。まわりの人々は恐らく、そのような交わりの中に、これまで馴染んで来た交わりにはなかった何か違うもの、すなわち、イエスが教えた「神の国」を見たのではないのでしょうか。そのことの故に、2章47節「民衆全体は好意を寄せ」、「救われる人々」即ち、イエスを救い主として受け入れ、告白する人が日々起こされて、仲間に加わったのではないのでしょうか。

「聖霊によって力を得て、地の果てまで、私の証人となるように」。これこそが、復活して弟子たちに会いにきたイエスが伝えたかったことでした。教会はイエスのこの言葉を形にしてゆくことを使命として始まりました。安心して空を見上げたまま突っ立っていた弟子達に天使は、「なぜ天を見上げているのですか。イエスはまた同じようにして帰ってこられますよ。」と言いました。そうであれば、今日、私たちも、「わたしの証人となるように」とのイエスの語りかけを聞いてゆきたいものです。そうする時に私たちは、あの弟子たちのように「いつ・どこで・ど

んな仕方です」という問いの答えよりも、もっと違う何かを、私たちに対する神の促しを待つでしょう。聖霊によって力を与えられるという約束を信じて、きっとそうすることでしょう。

〔祈り〕

神様

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでも私のもとに来なさい。休ませてあげよう。」と、御子イエスは言われました。

それによって私たちは慰められ、安息を得ます。

しかし直ぐに、「わたしの軛（くびき）を負い、私に学びなさい。」とも言われます。

すでに背負わなければならないものをたくさん持っていますのに、そう言われます。

「自分自身の十字架を背負って、ついて来なさい」とも言われます。

すでに一杯背負っていて、これ以上何かを引き受ける力も、余裕もない私たちに、そう言われます。

ですが、同時に主は、「わたしの軛は負い易く、わたしの荷は軽い」とも言われます。

「聖霊が降る時、あなたがたは、力を得る」と言われますから、その言葉を信じて、自分の十字架と一緒に、主の軛と荷と負うことができるように助けてください。そうすることで自分の十字架を負い、自分の十字架を負い続けることで、主の軛と荷とを負い続けることを許して下さい。そのような仕方です、あなたの証人として生きることを得させて下さい。

そうする時、約束して下さったように、平安を与えて下さい。休息を与えて下さい。

私たちの十字架と復活の主、イエス・キリストの御名で祈ります。

アーメン。